
るサツマイモでは、江戸時代から冬期間の種芋の管理が最重要であった。栽培する価値がないと見なされた種芋の放棄により在来品種は消滅したのである。開花、交配、採種、品種改良、在来品種と新品種の興亡など31～49節には興味深い記述が並ぶ。

文末になるが、正直なところ本書は素人には難しい本とも言える。しかし、本書を通してサツマイモの生い立ち、および日本におけるその技術と文化を楽しんで頂けると確信している。一読をお勧めしたい。

ミュンヘンのジャガイモ博物館

南ドイツのバイエルン州はジャガイモが多く生産される州の一つで、州都ミュンヘンにはジャガイモ博物館があります。1996年（平成8年）に設立され、館内には広い視野でみたジャガイモについての、さまざまな資料・絵画などが展示されています。

展示物は、いくつかの部門ごとにまとめられています。ジャガイモが辿った歴史については、インカ時代のイモをかたどった、もっとも貴重とされた装飾品ほか、身分の高い人々から庶民にいたるまで大切な食べ物とされてきた経緯などが示され、植物としてのジャガイモについては、茎葉・花・イモなどがわかりやすく絵で示され、塊茎（イモ）が欧州人の珍味とされるトリュフに似ているとの表示がされています。ジャガイモの栽培の模様、それに市場でジャガイモがどのように扱われているか、などの光景、食べる時に使われた食器、弁当として持ち歩いた桶など、暮らしにとけこんだジャガイモにつき、実物が陳列されています。ジャガイモの用途は広く、食用のほか、綾織り綿布その他布地の製造、製紙、包装資材、アルコール原料など、

一般の人たちが思いつかないところでも用いられていることが示されています。ジャガイモに関する骨董品・美術品の数々、そして多くの人の心を捉えるのは、貴族と豊でない人の食卓の対比で、貴族のテーブルには美味が並び、一方貧しい人のそれは実にジャガイモだけで、その落差の大きさに驚きますが、それだけにジャガイモが多くの人々の命を支えてきたことは、紛れもない事実であります。

このように展示は実物のほか、多くの絵画によっていますが、絵は油絵・石版画・ガラス板画工などが多く、現代風のものも数多くあります。19世紀後半から20世紀前半にかけての油絵がよく保存され、博物館はまたジャガイモ美術館といってもよいくらいです。畑での芽掻き作業、イモを拾い集めている様子、フリードリッヒ大王がジャガイモ畑で働く農民に話しかけている有様、などを描いた油絵は貴重で、来館者に深い感銘を与えているようです。

変わったところでは、ジャガイモの州と自任する米国アイダホ州の宣伝ポスターで、畑に立つ女優マリリン・モンローを描いたもの

ジャガイモの配給切符もありますが、第二次世界大戦中にドイツに滞在した人の話では、戦いがかなり激しさを増したときでも、ジャガイモは自由買い、戦争末期頃に配給制となりましたが、その量は日本人には多すぎるくらいで、ドイツの人たちにとって、いかにジャガイモが大切な食べ物であり、激しい戦いのさなかにあっても、その生産に力が入れられていたかがわかります。

100年くらい前のこの国では、年間1人あたりの消費量は250kgといわれました。大戦前にドイツの兵営に体験入隊した人は、朝こそパン（黒パン300gくらい）とコーヒーだけですが、昼と晩にはパンのほかに各自1kgのジャガイモが供されたのに驚いたそうです。ジャガイモの国でも最近若い人たちのイモ離れが進んでいるとのことで、2003年の統計では72kgとなっていて、以前の1/3以下に減ってしまいました。またこの国ではジャガイモは輸出品であると同時に輸入品でもあり、とくに加工食品の輸入が多く、都会暮らしの家庭の主婦も加工品で間に合わせることもしばしばとのことでした。

世界的に食べ物の均一化が進み、その国、その地方の食生活の特色が次第に薄れてゆくのは淋しいことですが、このジャガイモ博物館を見学することによって、ドイツの人たちも、また外国人もジャガイモのすばらしさを再認識するにちがひありません。

(編集部)



上：ジャガイモ耕作350周年記念切手（1997年発行）

左：ジャガイモの絵（1613年）